（写真）右 細川さん 左 山﨑さん

音楽パフォーマー

細川佳那枝さん

（ほそかわ かなえ）

1981 年生まれ
大分県出身の東京育ち。
2008 年より喜多方に在住
幼少より音楽に親しみ、現在は数々のイベントへの出演を始め、小学校の校歌や CM ソング等の作曲活動や FM きたかたのパーソナリティーをつとめるなど、幅広く活躍している。

喜多方に来たきっかけと印象

山﨑 喜多方に来たきっかけを教えてください。

細川 当時所属していた「インプロモーティブ」という即興劇団で、2005 年に喜多方発 21 世紀シアターを訪れたのが最初です。その次に、子ども劇場さんの演目に、音楽関係でかかわらせていただいて、そこから喜多方を行き来するようになりました。

山﨑 喜多方に来ての第一印象はいかがでしたか。

細川 （喜多方の方は）すごく親切だなと思いました。一度知り合いになると、何かと気にかけてくださって、イベントなどに出演する機会や様々な情報、更には野菜までいただいています。また、私がかかわっている方は、思いやりやホスピタリティを常に考えて行動するだけでなく、新しいことをやろうとしている方が多いので、刺激を受けています。

山﨑 そう言っていただけるとうれしいですね。喜多方は、ラーメンのまちとして有名ですが、蔵がたくさんあるということは歴史のまちでもあります。そして、何より教育のまちでもあります。人に対する優しさにあふれた瓜生岩子刀自、愛汗の碑の蓮沼門三、そして藤樹学など…。私は、喜多方を観光のまちでとどめておきたくないという思いがあります。喜多方では、平成 23 年に「人づくりの指針」を策定し、小・中学生を中心に教育に生かしています。この「人づくりの指針」の内容は、今初めて作り上げたものではなく、昔から喜多方の家族制度の中に存在していた教えがその土台となっています。また、人に対する思いやりや人を敬う心は、現在の喜多方の人にも脈々と受け継がれていると思います。

細川 私の友達も喜多方に来てくれますが、何度も足を運んでくれます。通常、観光地は一度行くと次は新しいところに行くことが多いと思いますが、何度も来てくれるのは、私がいることだけが理由ではなくて、人を含めて喜多方の居心地がいいからだと思います。

音楽パフォーマーとしての活動とやりがい

山﨑 音楽パフォーマーとして市内をはじめ様々なイベント等でご活躍ですが、活動するようになったきっかけは何ですか。また、やりがいを教えてください。

細川 原点は、大学時代から所属していた「the CRAZY ANGEL COMPANY」というパフォーマンス団体での活動です。そこは、「いかにお客様を楽しませるか」を基本に、演奏やダンス、演技などあらゆるパフォーマンスをミックスしたステージを作っています。そこでの経験が、今でも活きていて、どのような演奏の仕方をしたら一番伝わるか、楽しんでもらえるかを常に考えています。

　活動をしている中で、商業施設などでのパフォーマンスの際に、偶然通りかかった人が踊ったり、手拍子をしたりと一緒に盛り上がる空間をみんなで創りだせた時が、自分の思いが伝わっていることが感じられて、一番うれしいですね。
　また、学校で演奏する機会があるのですが、学校によってカラーが全然違うのでそれも新鮮です。子供はすごく素直で、つまらないか楽しいかが表情に出ますし、すぐ反応があるので、演奏しながらその学校にあった演出を考えています。

震災後、「ふくしま応援自由演奏会」を企画

喜多方での自由演奏会の様子

山﨑　現在復興支援として、**自由演奏会**を企画されていると伺いました。その内容を教えてください。

細川　もともと自由演奏会は、全国から音楽が好きな人が集まる参加型の演奏会として実施されていて、私は高校生の時に参加しました。震災後、イベントが自粛されていた時期に復興をテーマにした自由演奏会が関東で企画され、久しぶりに演奏しに行きました。そこで全国からの復興への思いを知り、福島でこそ開催したいと思ったことが、ふくしま応援自由演奏会の誕生のきっかけです。演奏会後、指揮者の先生に相談し、会津での開催が実現しました。（短期間での開催が実現したのも）全国の自由演奏会を経験した方の協力や、募金以外に何かしたいという思いを形にする場としてもらえたことが大きかったと思います。ただ演奏を楽しむだけでなく、復興への思いを改めて思い出してほしいという気持ちもあり、そこから毎年開催をしています。

活動をするうえで大切にしていること

山﨑　細川さんが活動するうえで、大切にしていることは何ですか。

細川　人と人との出会いやつながりは大切にしていきたいですね。一度かかわった人とのご縁を大切に、またそのご恩を忘れないようにしたいと常日ごろ思っています。

女性の社会進出のために

山﨑　細川さんは、様々なまちづくりにかかわっていらっしゃいますが、その中で感じることはありますか。

細川　やはり話し合いの場には、女性が少ないように感じます。夫婦でお店を営んでいるところでは男性が出てくることが多いですね。

山﨑　市政や社会生活の場においては、男性だけでなく女性の感覚も必要であると思います。喜多方は女性議員の進出が少なく、残念と思います。私は、昭和 58 年に市議会選に出馬しましたが、「親と子と孫が一緒に暮らせるまち」をスローガンに掲げました。これは、家庭の中の基本となるべきものですし、今でも私の活動の根底にあります。出馬に当たっては、夫が「これまで山﨑家のために一生懸命尽くしてくれたので、これからは自分でやりたいことをやりなさい。」と言ってくれました。

細川　時代を考えると、本当にすごいことですね。

山﨑　当時は、たくさんの子どもたちが交通事故で命を落とす時代でありました。命ほど大事なものはないので、私は子どもの命を守りたい、その一心で議員活動に励みました。当時は、「市議会議員に女が出て、何ができるの」と言われる時代でした。私は、思いがあって議員に出ましたが、その後なかなか女性の議員が誕生しません。家

庭の中で、その要因となることがあるのかもしれません。

細川 市議会議員になるということは、本人の覚悟も必要でしょうが、周りの協力も必要になると思います。家族に相談して、合意が得られなければ、二の足を踏みますよね。

山﨑 喜多方は、人情味の厚いまちではありますが、一方、男性上位の考え方が残っているように思います。女性の中にも、市議会議員を目指したい人はいると思いますが、いったん家庭に入ると、「家長である男（夫）が出ないのに、なぜ女が出るの」というような風潮があるように感じます。また、女性自身が遠慮されているのではないかとも考えられますが、どうでしょうか。

細川 喜多方だけではなく、他の地域でもそうであるとは思います。人それぞれに優先すべきものがあって、家族全体で一致すればいいのですが、ある人は子どもで、ある人は仕事で、またある人は何かを起こしたいという思いがあって…「市政に出てみなよ」という結論に達することは難しいと感じます。市議会議員になるということは、市政を背負うことになるので、家族の相当な覚悟が必要になると思います。

山﨑 女性は、「議員活動を行いながら家庭を守れるか」ということを考えるのではないでしょうか。私は、以前ニュージーランドに行ってきましたが、そこは世界一の女性の登用率の高い国でした。あるまちで男女共同参画の勉強会を行ってきましたが、議員の約6割が女性で、議長、市長、州の長も女性でした。また、審議会委員の約8割を女性が占めていました。生まれた時から、「男性だから…、女性だから…」という考えはないため女性の登用も進んでいるということでした。女性の視点からまちづくりが行われているので、まちの隅々に繊細さを感じました。

細川 （日本でも、）学校では男女の差なく、女性も活躍しています。私が以前勤めていた会社でも勤務条件はほとんど男女平等だったので、社会自体はだんだん改正されていると思います。ただ、家庭だと少し変わってくるのかもしれません。例えば、付き合いで外に出るとしても、女性は、家事や育児はどうするのかと言われそうな気がします。

山﨑 私自身、交通安全母の会の会議を開催する際は仕事帰りの時間を設定し、会議も手短に進めるようにしています。一旦家に帰ってしまうと、食事の準備や後片付けで会議への出席が難しく欠席してしまいます。（こうした状況をみると）まだまだ家事は女性任せにしていて、家族の協力的な雰囲気ができていない家庭が多いように思われます。

細川 相手を理解しようとする気持ちに男女の差があるのかもしれませんね。お互いの立場を理解することや活動することの大切さを伝え、それを理解すれば、自然と送り出してくれるのではないでしょうか。

山﨑 互いを認め合う時代になっているので、女性に対してポジションを与えるなど発言の機会を設けるとともに、女性自身も思いを言葉に出せるようになっていければと思います。

お互いの理解を深めるために

山﨑 男性の方々が自然と思いやりや声かけができるようになる機会はないのでしょうか。

細川 妻自慢大会があると面白いと思います。夫の自慢内容で家庭のカラーがでるのではないでしょうか。家事であったり、社会活動であったり。集まった人同士で互いが認めていることが分かりますし、やるとしたら、ぜひ異なる意見が出てほしいなと思います。そして、その自慢ポイントを奥様も見れば、自分自身を振り返る機会になると思います。

山﨑 それは面白い提案ですね。教科書を読むよりも、反省材料や進歩する材料になりますし、男女共同参画社会の推進のためにも効果がみられると思いますので、ぜひ企画したいものです。

子育てや夫婦、家族について

山崎　日本では結婚する際、後継ぎや同居の話が出ることが多いかと思いますが、細川さんが親元を離れ、喜多方で暮らすことについてはいかがだったのでしょうか。

細川　両親は、私がどこに嫁ぐかは特に問題にしていなかったので、自由に決めることができました。その後、家族で話し合い、やはり近くにいた方がお互い安心するからということで、東京から喜多方に両親を呼びました。また、同居についても強く希望することなく、むしろ子どもの自立を大切にするような家で、夫の家族も同じような考え方であったと思います。

山崎　ご両親が、子どもを後継ぎだなどと言って家に縛りつけることなく、自分の生き方ができるよう一人の人間として育てたのですね。また、夫婦お互いの両親が見守ることのできる距離に住んでいて、将来を考えた関係づくりもされています。

細川　家族の中で会話する機会が多くあり、両親とはお墓のことや老後のことなど先を見据えた話をしています。それを各家庭で持ち帰って、今度は子どもとしてできることやこれからかかわり方について話す、このようにお互いコミュニケーションを取ることが良いのではないかと思います。

山崎　このたび喜多方市男女共同参画審議会は、市の施策に対し意見書を提出しました。その中に、幼少より男女共同参画意識が育まれるようという文言があります。細川さん自身、子育てについてはどう思っていますか。

細川　私の家では、（お互い）日によって働いている時間が違うので、家事に明確な分担はなく、お互いできる時にできる方がするようにしていています。性別による分担があまりないので、固定観念なく育ってくれるのではないかなと思います。ただ、一般の家庭と生活スタイルが違うので、子どもが他の家庭と比べた時に、自分の家庭のことを前向きにきちんと説明できるようにしたいですね。また、近くに両親もいるので、二人で育てるというよりも、みんなで協力して育てる環境を作っていきたいです。

きたかた喜楽里博オープニングの細川さん

山崎　良いことを聞きました。男女共同参画の実現のためにも、子どもが小さい時から、男だから女だからと育てるのではなく、一人の人間として育てることが大切であるとともに子どもの個性と能力が発揮できる環境づくりにも視点を向けていかなければと思います。また、これからも喜多方市の男女共同参画の実態をよく把握し、実効的な男女共同参画審議会の形成に向け努力したいです。

今後の活動に向けて

山崎　細川さんは、音楽教室などでたくさんの女性と触れ合っていると思いますが、どのような感想をお持ちですか。

細川　教室に通っている方は、みなさんとても元気です。私の生徒さんのほとんどが子育てを終えて、時間などに比較的余裕があるからかもしれません。子育て中の女性ももう少し心のゆとりが持てる環境を作ることができればいいなと思います。

山崎　今後の活動は？

細川　これからもたくさんの方に音楽を通してお会いしたいと思います。
　また、仕事をいただいたときに、たとえ今までやったことがないことでも、「できない」と思わず、「これはチャンスだ」と思う姿勢でいきたいです。実際、できると楽しいですし、次への自信にもつながります。